
ドナレインの夢

木綿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドナレインの夢

【Nコード】

N1417S

【作者名】

木綿

【あらすじ】

ドナレインの恋人は黒騎士。黒の甲冑を身に纏い、魔物と戦って退ける。

けれど一私人としての彼は無口で冷酷で凶暴で、名前を呼ぶことさえ許してくれない。

そして悲劇は起こる。

それでも確かにドナレインは幸せだった。

1・夢であればどんなにか

人は死んだらどこへ行くか知ってる？

天国？ 地獄？ あの世？

そうね、ではあの世はどこにあるか知っている？

それはね、夢の中にあるの。夢の世界には死んだ人が暮らすの。

だからね、もしあなたが大切な人を亡くしてしまったのなら、それはとても悲しいことだけれど、でも夢できつと会えるから。

夢の中で、きつとまた会いに来てくれるから。

だから嘆いてばかりではいけないわ。夢を見るためには安らかな眠りが必要だから。

後悔も悲しみもすべて夜に預けて、心穏やかに羊を数えましょう。

黒の兜に黒の鎧。手に持つ槍や剣の刀身は流石に黒くはないものの、その柄もそれに張り巡らされた装飾も黒一色。

黒騎士。

人々は何の捻りもなく、彼らをそう呼んでいた。

夜には悪魔が出る。

それははるか昔から言い伝えられてきたことだった。

悪魔は人を襲う。

それもまた、天地の始まりの時から定められていたかの如くに当然のことであつた。

そして実際に、日が暮れたとはいえ灯りの燈された人里に夜な夜な魔物が現れては残虐の限りを尽くすようになったのも、今は昔のこと。かつては夜に人が気軽に外を歩くこともあつたのだが、そんな状況は百年前の御伽噺にしか残っていない。

だがその魔物どもから国と民を守るべく、時の王が教会に頭まで下げて協力関係を築き、魔物と戦う力を持った人間を集め訓練し警備体制を整えて、全国にあまなく対魔防衛網を作り上げたのだけは、そこまで遠い話でもない。少なくとも、その王の御世に既に生を享けていた者の何割かはいまだ存命である。

魔のものと戦う力を持ち、王と教会の命を受けて夜の警備にあたる人間を、その見てくれのために誰からともなく黒騎士と呼んだ。

自らを地方都市と称するシグリットは、都から遠く離れてはいるが流通の便は良く、商店や娯楽施設も多く国立大学をはじめ複数の高等教育機関もある。住人は多くはないが少なくもなく、田舎街の風情を漂わせていた。

シグリットはかつて堅牢な城壁に囲まれた要塞都市であつた。時を経るにつれ人の数も増え、やがて居住区は要塞の外にはみ出した。堅牢な城壁を撤去するのは至難の業であつたため、門から鉄扉が外されさらに新たな門を増設して行き来を容易にした。壁など物ともしない身体能力を持つ魔物が相手では、どのみち城壁など役に立たない。

だがそれでも、旧城壁の外は中より無防備であつた。そのため、通常夜に行われる二名一組の黒騎士の巡回は、城壁の外では日も暮れぬうちから行われていた。戦闘ではないルーティンワークの巡回業務を、まだ明るいうちから行わねばならぬ黒騎士も所詮人の子。

街が仕事を終えた人々で賑わい食堂や酒場が混雑する中黙々と業務をこなすのが楽しいわけではない。そのため、一般人の恋人や友人を付き合わせて巡回する黒騎士の姿は決して珍しくなかった。流石に深夜までは付き合わせはしないが、夕方は女性を引き連れて歩き、夜も深くなる頃家で家まで送り届ける。そのため黒騎士のお相手は配属されたその夜の巡回の経路上に家がある人間に限られた。

シグリット最西端のイストリチエ地区の西半分に配属された黒騎士二名は、一人が飛びぬけて背が高く、もうひとりには中肉中背にも関わらず住民に「チビ」と称された。二人ともシグリットの出身ではなく都から派遣されてきた騎士だった。

背の高いほうは際立って無口で愛想がなく、名前すら教えようとはしなかった。魔物を倒す腕は確かだが、そのやりくちが酷く残酷で情け容赦ないという。私生活でも冷酷で凶暴な性格で恐れられていた。ある日、勤務時間外に黒騎士の装束を脱いで手ぶらで街を歩いていた彼に、街のつまはじき者が絡んだことがあった。黒騎士とは気づかずに刃物で脅しをかけたチンピラ共は、過剰としかいえない報復を受けて全員病院送りにされた。命こそ奪われなかったものの、一生残る障害を負わされたという。その他にも釣り銭を間違えただけで締め上げられたとか、余所見して歩いていてうっかりぶつかったら次の瞬間投げ飛ばされていたとか、その手のエピソードには事欠かない。

一方中肉中背のほうは愛想も良く、若い女からは特に好かれていた。絶世の美男子というわけではなかったが、悪くはない顔に可愛げと滑らかなリップサービスがつけば嫌悪を抱くことは難しい。巡回の際もほぼ必ず女連れだった。とはいえその相手が毎回異なるために、男や中年以上の世代からは快く思われてはいなかったが。こちらの黒騎士は誰にも気軽に名乗っており、名をクレードルといった。

ある雨の日の夕刻に、彼らはいつも通りに巡回に出掛けた。いつも通りに女連れだった。

背の高いほうには恋人がいる。ドナレインというシグリットの街の娘で、栗色の髪をした女だった。とうに成人しているが、小柄で童顔であるせいでまだ少女のように見える。恋人といえば聞こえはいいが、実態は下働きに夜の世話が加わったような扱いであることを誰もが知っていた。内気な性格のせいで親しい友人は少ないが、善良な性質であることは街の誰もが知っていたので、黒騎士との関係を心配する者は多かった。黒騎士は毎夜ドナレインを連れ立って歩くが、話しかけるでなく労わるでなく、ただ着いてくるに任せるだけだった。ドナレインのほうも来たくて付き従っているのではないのだろうと見て取れた。二人は一緒に暮らしている。夜に家で一人になるよりは、騎士に付き従っていたほうが良いという判断だろう。

クレードルのほうは赤毛のヴェネラという娼婦をひとり連れ歩いていた。両親のそろった家の娘は最早彼には近寄ろうともしない。必然的に、お相手は玄人の女性ばかりになる。仲良く会話に興じているようにも見えたが、兜の下で騎士がどのような表情をしているのかは知れたものではなかったし、ヴェネラのほうも妖艶な笑みを浮かべつつ瞳に浮かぶ光は冷ややかだった。

「……何だか、このあたりはやけに静かだね？」

小さいほうの黒騎士が首を捻った。イストリチェ地区でも旧城壁の外側にある西半分の北側に足を踏み入れた時だった。雨の夜に外出する者がいるとも思えないが、寝静まるにしては早い時間であった。

「ゼゼロの親父の酒場にでも集まってるんじゃないの？ このあたりじゃ唯一の飲み屋だし、あそこの目の前に広場と教会があるんだもん」

答えたのはその連れの赤毛の娼婦だった。広場と教会は何かあったときのための避難所であるので、その推察は悪くはなかった。加えてここらの地区は長屋が多く、それだけでなく魔物対策にと家々を繋ぐ通路が発達している。それほど外に出ずに移動できるから、

家にこもるのに気が塞いだ人々が酒場に集まっても不思議はなかった。

背の高い黒騎士は、無言で酒場へと向かって歩き出した。連れの恋人が慌てて追う。

「黒騎士様」

どういうわけだが、恋人であるのにドナレインが黒騎士の名を呼ぶことはなかった。ひよっとしたら彼女さえ名を知らないのかもしれないと、街の噂にもなっていた。

通常の巡回のコースを外れた恋人に従いつつ、彼女は不安げにもう一人の黒騎士を振り返る。背の小さいほうは肩を竦めた。

「ま、順路を少し変えるくらいは問題ないさ。僕らも行こう」

赤毛のヴェネラの腰に手を回し、彼もまた歩を進めた。

果たして赤毛のヴェネラの言うとおり、ゼゼロの酒場は人で溢れていた。

雨の夜にも拘らず賑やかな雰囲気だったが、黒騎士二人が現れた途端、その場は水を打ったように静まりかえった。

そもそも都から派遣されてきた黒騎士は、市民よりは身分が上なのだ。何かにつけ特別待遇を受け、敬意を表される。少なくとも、そうされるべきであると法で定められている。市民は彼らの命令には従わねばならないし、機嫌を損ねてはいけない。

夜の外出は控えるよう厳命されているにも拘らず飲み屋で騒いでいるところを見つかつて、店の客は少なからず慌てた。屋内へ避難はしているのだからと自分自身では言い訳が出来たが、どうにも迫力のある黒甲冑を前にしては言い訳より畏怖が先に立つ。加えてこの地区の黒騎士はどうにも扱い辛い相手であった。

凍りついてしまった中で一人、余裕の態度を崩さなかったのは酒場の主人のゼゼロだけであった。小柄でやせっぽちで薄い白髪頭の老人は、見た目に反して豪胆で知られていた。

「いらつしゃい、黒騎士の旦那がた。ヴェネラもドナレインも、こ

んばんは」

「こんばんは」

「お久しぶりね、ゼゼロの旦那」

ドナレインと呼ばれた黒騎士の恋人が控えめに挨拶を返し、ヴェネラは愛想たつぷりに微笑んでみせる。

「で、旦那がたはどういったご用件で？ お望みなら酒でも何でもお出ししますが、確か任務中はいけねえんでしょ？」

「夜の外出は控えるようにと通達はなかったかい？」

クレードルが冷ややかに訊ねる。場の空気は一際冷たくなったが、ゼゼロは肩をすくめて飄々と返した。

「閉じこもってばかりじゃ気が滅入っちまいますあ。外出つつたつて雨なもんでテラスはあけてねえし、俺はそもそもここが家だ。飲み屋に夜営業するなとおっしゃるんで？」

「客人はどうなんだい。帰りに魔物に襲われたらどうする」

「ハッハ！ 旦那がたはこいつらをご存じねえから。どうせ朝まで飲み明かすさ、そうでなかった例があるかい」

クレードルが押し黙る。場は相変わらず凍りついたままだった。

「……あの、黒騎士様。いつそ皆で集まっていたほうが安全でしょうし、問題はないかと」

「黙りなさい、ドナレイン。君の意見は必要としていないよ」

ぴしゃりと言われてドナレインは身を竦ませる。恋人であるはずの背の高い黒騎士のほうは相変わらず無言だった。

「……一応、ここにいる人間の確認をさせてもらう」

「どうぞ。ヴェネラにドナレイン、ついでだからおめえらは何か飲んでくかい？」

「あら良いわね」

「私は……結構です、ありがとうございます」

嫣然と微笑むヴェネラと、はにかむドナレインの様子に、やっと少し場の雰囲気が温まる。黙りこくっていた客席から声が上がった。

「ヴェネラ！ 俺に奢らせてくれよ」

「ドナレイン、あんたもお飲みよ。ほら、あたしらの所においで」
ヴェネラは男衆に、ドナレインは女衆の席に引きずり込まれる。
ヴェネラが楽しげに男と会話する中、ドナレインは女友達と多少年上の中年女性に囲まれて内緒話に加えられた。

「ねえドナレイン、あんたまだあの黒騎士と一緒に暮らしてるの？」

「え……」

「あれはろくな男じゃないよ」

「……」

「もうやめなよ、出ておいで。あんたなら他に良い男がいっぱいいるさ」

「そうよドナ、あんた良い子なんだから。あんな乱暴な男に家政婦扱いされて黙ってることないのよ」

「……………」

「ドナレイン、あたしたちあんたの事が心配なんだよ」

「……聞こえるわ」

ドナレインは人差し指を口の前に立て、悲しげに微笑んで首を横に振った。

「ご心配ありがとう。皆が私のことを思ってくれてるのは分かってるの。ごめんなさい、でも——」

「——全員いるね」

クレードルの良く透る声が響き、はっと店内の注目が彼に集まる。
「ここらの数十軒が皆集まっているんだね。それは辺りが静まり返るわけだ。確認は取れたし良いだろう、けれどくれぐれも迂闊に外に出ないように」

二人の黒騎士は出口へ向かう。ドナレインは慌ててそれを追った。
「——ヴェネラ？」

男衆とのお喋りに興じていたヴェネラは、そう呼ばれて初めて席を立つ。一瞬不機嫌そうな顔になったのは店の客達にしか見えなかった。

けれども店を出て十歩も歩かないうちに、魔物の大群が降りかか

ってきた。

「いやー！ 何よこれ！」

魔物の大群を前にヴェネラが叫ぶ。その赤い髪に鴉のような魔物の両足が引つかかり、宙へ引き上げられようとしたとき、黒騎士の剣が一閃し足を切り落とした。鴉のような魔物は地に落ち、ヴェネラの髪に鋭い爪のついた足が残る。

ゼゼロが店から飛び出そうとしてきたところに、背の高い黒騎士の鋭い叱責が飛んだ。

「鍵を閉める！」

地の底から響いたかのような低い声にゼゼロは一瞬硬直するが、すぐに我に返る。

「何言ってんだ旦那、ヴェネラとドナレインが！」

「いいから早く、言うとおり鍵をかけるんだ！ 彼女たちをそちらへやる余裕はない！」

クレードルも叫ぶ。店からほんの数メートルの距離にも既に魔物が現れており、ヴェネラやドナレインは走っても辿り着くまでに魔物の牙にかけられてしまうであろうことは容易に想像できた。

逡巡してドアを閉めたゼゼロの悲痛な表情を、ヴェネラもドナレインも知らない。魔物の咆哮や羽音に怯え悲鳴を上げながら、黒騎士の背に隠れるので手一杯だった。

次々と襲い来る魔物達を相手に、背の高い騎士は大剣を繰り出し、クレードルは槍を突き出す。背後に女を庇いながら、無数の魔物を相手にたった二人で抗戦していた。

緊急事態を告げる鐘が鳴り響く。してみると魔物が現れたのはこの一角だけではない。増援は期待出来ないかもしれない。

ドナレインは恋人を信じているが、怖いものは怖かった。ヴェネラにいたっては半狂乱である。

魔物の牙や爪にかけられ傘はボロボロで、使い物にならなくなっ

たので捨てた。ずぶ濡れで守られつつひたすらに逃げ回る。

やがて無限に沸くかと思われた魔物の数に限りが見えてきた。それに終わりが近いと悟り一瞬安心したのがいけなかったのか。

ドナレインは突如背に強い衝撃を感じ、地面の水溜りに押し倒された。

「ドナ！」

ヴェネラが叫ぶ。押しつぶされそうなほどの重さを感じた直後、焼けつくような痛みが襲ってきた。

「きゃああああああつ！」

背中が引き裂かれる痛みに絶叫した。

酒場の窓を誰かが半狂乱で叩く音がする。雨が降りつける。

ドナレインは自分の上で一際大きく咆哮する魔物の声を聞いた。

「騎士、様……助けて……！」

自分の恋人に向かって手を伸ばす。背を向けていた黒騎士は大剣を大きく横に一振りして目の前の魔物をまとめて薙ぎ払い、ドナレインにのしかかる毛むくじらの黒い魔獣に向き直って剣を突き刺した。

「ギヤアアアアア！」

黒い魔物はその痛みのあまりこの世のものとは思われぬ絶叫を上げて暴れ狂った。ドナレインの背にかけた鋭利な爪はそのままに。

「——！」

我を失った魔獣に滅茶苦茶に肉を抉られる痛みに、ドナレインは最早声も出ない。騎士様、と呼びかけようとして最早唇も動かせないことを知った。

背の高い黒騎士が繰り出した大剣は魔物を貫きはしたものの、骨に食い込んだか引き抜くことが出来ない。黒の兜の中で舌打ちして騎士は上を仰ぎ、小さな炎が揺らめく街灯に目を留めた。足元に転がった魔物の死骸を掴み、投げつける。街灯のランタンを支える柄は衝撃に耐え切れずに千切れて、ランタンが落ちた。

魔物に直撃してガラスが割れ、炎が燃え移る。黒い魔獣はあつと

いう間に火達磨になった。

——その下に組み敷いたドナレインもろとも。

断末魔の悲鳴は、果たして魔物のものだけだったか。

残りの魔物もすべてクレードルの槍に屠られ、戦闘はようやく終結した。黒い毛むくじらの魔獣を倒した炎も雨に打たれ、どこに燃え移ることもなく消えていった。

水溜りの中に沈んだドナレインの体は、最早ぴくりとも動かなかった。

2・夢のように幸せ

あの恐ろしい雨の夜から数日。

青空の下を、ドナレインは上機嫌で歩いていた。

今日は何だか気分が浮き立つ。いつもなら軽く済ませる化粧も今日はばっちり決めて、まだ何度も着ていない新しい服に身を包んで、街の中心部に繰り出した。

「こんにちは、ドナレイン」

「こんにちは！」

元気良く挨拶を返すのも、引っ込み思案のドナレインにしては珍しいことだ。声をかけてきてくれた顔見知りたちは少し驚いたような顔をして、それから笑顔になった。

足取り軽く街路を歩いていると、二三人の女友達に呼び止められる。

「ドナ！ ちょっと、もう怪我は大丈夫なの？」

長袖にロングスカートに念入りに施した化粧。彼女たちには何も見えないはずだ。

「ええ、私もうすっかり元気よ！」

「良かったあ！ もう、心配したのよ！」

「ごめんなさい」

「謝るところじゃないわ！」

「そうよ、謝るべきなのはあの男よ！ 黒騎士のくせに恋人も十分に守れないなんて！」

「まったくだわ！ 本当に、ドナを一生守りとおせるくらいじゃないや恋や恋人なんておこがましいわよ！」

ドナレインは一瞬呆けて、それからくすくすと笑い出した。

「ありがとう」

今までずっと、黒騎士との関係には眉を顰められてきた。善意で心配してくれているのが分かるからこそ、辛かった。だってドナレ

インは幸せなのだ。傍目にどれだけ蔑ろにされているように見えても、黒騎士の恋人の傍にいただけで幸せだった。だから、自分は幸せなのに、友人に心配をかけて悲しげな顔をさせてしまうのが心苦しかった。

けれども今日は少し違う。友人達は眉根を寄せて別れるとは言われず、彼をドナレインの恋人と認めた上でドナレインのために怒ってくれていた。それがとても嬉しかった。

何分か立ち話をして友人と別れ、目的地へと向けて歩き出す。陽気が心地よく、爽やかな風が吹いている。足取り軽く歩を進めっていると、突然後ろから肩を掴まれた。驚いて振り返ると、そこには背の高い黒髪の男が立っていた。

「シ……黒騎士様！」

ドナレインの恋人だった。鉄兜も鎧も身に着けてはいないが。黒い甲冑の中身は、黒い髪に群青の瞳、筋骨隆々として長身の若い男だった。

「シグリッドでいい」

「え？ でも……」

黒騎士は都から派遣される。ドナレインの恋人は、派遣先を名前で決められたそう。名前が似ているからと、縁もゆかりもなかったこのシグリッドの街への出向を決定された。それに触れられるのが嫌だったらしく、同棲を始めて数ヶ月経つまで本名を教えてもらえなかったし、教えてもらってからでも人前では決して呼ぶなと命令されていた。

「今日は構わない」

「……じゃあ、シグリッド様」

お天道様の下で恋人の名を呼べるのは、思った以上に幸せなことだった。知らず口の端が上がる。

「どこへ？」

「お出掛けです。音楽学校へ行こうと思って」

「音楽学校？　なぜ」

「今日、入試なんですよ。実技試験は一般公開もされているから、見に行きたいんです」

「……」

「お暇でしたら一緒に下さいませんか？」

普段の内気なドナレインであれば、シグリッドの顔をびくびくと窺ってこんなことは口にも出せなかっただろう。けれども、今日のドナレインは常になく機嫌が良くて、不可能など何もないような気分だった。世界は自分の幸せのために動いていると感じるほど。

果たしてシグリッドは断らなかった。ドナレインは今まで一度も試したことすらない行動に出た。シグリッドの手を引いて歩き出したのである。

「じゃあ、行きましょう！」

シグリッドは、これまで腕を組ませてくれたこともなかった。それでも、今日はドナレインの手を振り払うこともなく歩調を合わせて歩き出した。

音楽学校の受験者は年若い少女たちがほとんどだったが、年齢制限を設けていない学校なので成人した受験者もちらほらいたし、男性の受験者もいないわけではなかった。それに加えて受験者の家族なども詰めかけていたので、ドナレインとシグリッドもさして目立たなかった。むしろ受験者と間違われて何度も違うと説明する羽目に陥った。

「……なぜ、音楽学校の入試などに？」

「私、音楽が好きなんです。ずっと勉強もしてるんですよ。今は独学ですけど、前まで先生について歌を習っていたんです」

数秒の沈黙があった。シグリッドは端正な顔立ちを、眉間に皺を寄せていくらか損ねてしまった。

「……お前は受験しないのか？」

「出願期間を逃しちゃって。それに、時間もお金もありませんから」

でも、夢に向かう子達の姿を見たかったんです、と言ってドナレインが笑った。エントリーが終わり、ステージに最初の受験者が現れた。

これから音楽学校に入学しようという受験者の演奏レベルはそう高くない。というより、酷いものである。とても人に聴かせる域には達していない。

けれども彼らの演奏には『未来』が満ち溢れている。まだ青い薔土に埋もれた原石。まだ形も定まらない粘土。

将来どのように化けるかという想像を嫌というほどかき立てられる。たまらなく気分が高揚した。

それに、まだ人前で演奏することに慣れていない彼らの緊張しかった様子も初々しくて微笑ましい。はしゃぐ心を自分の中だけに押しとどめるのに苦労した。

ようやく試験が一段落すると、ドナレインはシグリッドを伴ってサナルームに移動した。

「……何だここは」

「美しい音楽は満たされた幸福から。この音楽学校、教育のレベルも高いけど施設も贅沢なくらい豪華なんですよ。今日は一般に開放されているし、ここでちよつと休んでいきましょうよ」

カウチに寝そべり、陽光を浴びる。

「んー、気持ちいい……」

陽気が眠気を誘う。ふわふわと夢見心地でまどろんでいると、シグリッドがこちらに目を向けずに声を絞り出すのが聴こえた。

「……すまない」

「え？」

「お前を守れなかった」

「……何のことですか？」

悲痛な表情で押し黙るシグリッドに、ドナレインは笑顔を向ける。「いいんですよ。私は今幸せなんですから。とってもとっても、幸

せなんですから」

「俺は……」

「何も謝ることなんてありません。ね？」

シグリッドは言葉を失ったかのように再び沈黙した。ややあつて、彼は別の話題を見つけるのに成功したようだった。

「俺は、何も知らなかったな。お前が音楽を好きだということさえ」「言つてませんもの、当然ですよ」

「音楽学校を受験したがっていることも、下手糞な演奏でも目を輝かせて笑うことも、何も知らなかった」

「シグリッドさ——」

「すまない」

「あの」

「本当に、すまない。お前は俺に全身全霊で尽くしてくれたのに、俺はお前に何ひとつしてやれなかった。お前のことを知ろうとすらしなかった」

「そんなこと」

俯いてしまった彼に、ドナレインは途方に暮れる。こんなことは初めてだった。そもそもシグリッドがこんなに言葉をかけてくれることすら、今までになかったことだ。

「あのですね、シグリッド様。私、幸せでしたよ？」

もちろん、ドナレインだつてもっと大切にされたいと願わなかったわけではない。友人が恋人にプレゼントを貰ったり、一緒に出かけたり、愛情たつぷりに抱きしめられたりするのを見聞きしては羨ましいと思っていた。それでも。

「だってね、お家でしか許してもらえなくても、私にだけ名前を呼ばせてくださることがどんなに嬉しかったか。私の作ったものを食べてくださつて、私が洗った服を着て、私が掃除した家で暮らして、それがとつてもとつても嬉しかったんです」

贈り物もデートもスキンシップも、シグリッドからでなければ意味がなかった。どれだけ完璧な男性に愛を囁かれたとしても、シグ

リッドが隣で眠ることを許してくれた時の喜びには敵わない。他の誰から貰う誕生日プレゼントより、その日だけは寝坊してもシグリッドに咎められなかったことのほうが嬉しかった。ケーキもカードもブレゼントも、祝いの言葉ひとつなくても、それが何より嬉しかった。

「多分それが、愛するということです。私はシグリッド様をお慕いしていますから、どんな小さなことでもシグリッド様が絡めば大きな幸せになった。取るに足りないことをめくるめく幸福に変えてくれた方が、どうして謝ることなんてあるんですか」

けれども、言い募るほどにシグリッドの表情は険しくなる。本当に、今日のシグリッドはらしくない。というより、まるで別人だった。あの冷酷で知られる黒騎士が、ドナレインの前で罪悪感に打ち震えようとは！

「……俺はお前に、愛していると言ったことがあったか？」

一瞬きょんととして、ドナレインは記憶を手繰る。

「……」

覚えている限りでは、なかった。

「いいえ。でもそれが何だと言うんです？ 私はあなたを愛して、そのために私は幸せだった。今までもこれから、何があるうとそれは変わらない」

「俺は、お前を——」

ドナレインは人差し指を恋人の唇に当てて声を封じる。首を横に振った。

「いいんです。何も変わらないんですよ。私はあなたを愛していて、だから私は幸せ。それ以外のことは何も関係ない。

ねえ、シグリッド様。夜は私を抱いて、私を抱きしめて眠らせてくださるでしょう？ それがどんなに大きなことか、知ってもらう術さえあつたら。どんな人だって私ほど幸せではないことを分かってもらえたら」

シグリッドはもう何も言わなかった。代わりにその胸にドナレイ

んを抱きしめる。暖かとても心安らいで、思わず涙が溢れた。

——本当に、これ以上の幸せはない。

3・夢はいつか覚める

試験も終わって音楽学校から出たところで、シグリッドを見失ってしまった。

日は傾き始めていた。今晩も巡回の任務があったような気がする。そのために戻ったのかもしれない。

少し残念な気分ではあったが、それでもまだまだ上機嫌が続いていたドナレインにはさして気にならなかった。折角なので外で夕食してみようと、前々から気になっていたレストランに入る。

立地の良い高級レストランなのでこれまで一度も入ったことはなかったが、今日に限ってはとても気分が良く、ぱっと散財してみたかった。

料理は味も見た目も上品で、頬が落ちるほど美味だった。内装も美しく店の雰囲気も良くて、穏やかな幸福感に全身が包まれる。

小額ではない代金を支払うときも、幸福感はいつこうに揺らがなかった。

店を出ると、空はもう紫色になっていた。黄昏時の空の美しさにほうつと息を吐く。一番星を探して空を見渡していると、突然見知った顔が目の前に現れた。

「シグリッド様！　びっくりしたあ」

長身のシグリッドには、小柄なドナレインを真上から見下ろすことも容易である。空から人の顔が現れて飛び上がった心臓をなだめながら、ドナレインはシグリッドに微笑みかけた。

「どこに行っていた？」

「そのレストランです。一度でいいから行ってみたかったですよ」

「……良かったか？」

「はい、それはもう！　美味しくて美味しくてとろけちゃいそうでした」

「そうか」

上気した頬に夕方の風が気持ちいい。ドナレインは両手を広げてくるりと回った。踊り出したいくらいだった。

一方で、シグリッドはどこか悲しそうな顔をしていた。初めて見る顔だ。シグリッドの顔におよそ感情というものを読み取ったことは、これまで一度もなかった。

「……もついいだろう？」

「え？」

「もう、帰ろう」

「帰るって……どこに？ 家にですか？」

「いや……ああ、家にだ。俺達の家に戻る。俺達の、現実に戻る」

その途端、ドナレインの幸せな気分は嘘のように消え失せた。

長い沈黙があった。数十分、身じろぎもせず対峙していた二人の沈黙を破ったのはドナレインのほうだった。

「……あーあ。やっぱり、気づいてらしたんですか。これは夢だった」

「……」

「そうですね。現実の私は、こんな大胆な行動は取れません。自分からあなたの手を引いたり、自分だけの趣味につき合わせたり、まして白昼堂々愛していると口にするなんて」

「……」

「それに何より、現実のあなたは人前で名前で呼ばせてなんてくれません」

名前だけではない。ドナレインに向かって謝罪すること。一緒に出かけてくれること。感情も露わに言葉を尽くして語りかけること。どれもこれも、現実ではありえないことだった。

「夢だと分かっているのなら、帰ろう」

「どうして？」

間髪入れずドナレインは訊き返した。

「戻る必要なんてない。この夢の中で、私は幸せです」

「頼む、戻ってくれ」

「どうして？」

「俺はお前に、戻って欲しいんだ」

「どうして」

「どうしてといって……」

ああ、この人は何も分かってはいないのだ。ドナレインは溜め息を吐く。戻ったって何も変わらないのに。

「夢でも現実でも、何も変わりません。言いましたよね、私はあなたを愛しているって。それだけが確かな真実で、あとは何も関係ない。夢でも現実でも、変わらず私はあなたを愛しています。深く深く、あなたをとっても愛しています」

「ならば帰ってくれ。夢でも現実でも変わらないというのなら、俺のために現実に戻ってくれ」

去った幸福感の代わりに、悲しさがドナレインの胸に去来した。

瞳が潤むのを感じる。

「いいえ、あなたは分かっている。これは私の夢なんです。夢でも現実でも私は変わらずあなたを愛しているけど、あなたはそうではないの。夢のあなたがどれだけ深く私を愛してくれていても、現実のあなたは私を愛していない」

シグリッドが目を見開いて首を横に振る。ドナレインは悲しく微笑んだ。

「違うと言いますか？ 私は愛を知っているから、自分が愛されていないことくらい分かります。それでも良かった。あなたを愛して、私は幸せだったから」

「現実の俺には愛されていないから、戻りたくない？」

「いいえ。言ったでしょう？ あなたの心がどこにあるって、私はあなたを愛して、それで幸せなんです。夢でも現実でも、愛されて

いてもいなくても」

「ならば帰ってくれ！」

堂々巡りだ。本当に、これは自分の夢なのだろうか。どうして夢の中でこんなことまで説明しなくてはならないのだろう。

それとも、自分は心の奥底で本当はこれを望んでいたのか。現実に戻ってくれと、シグリッドが懇願する様を？

あまりぞっとしない考えを振り払い、ドナレインはすべての覚悟を決めた。

「シグリッド様。私は帰りたくないんじゃない。帰っても、何の意味もないんです。

何の変わりもないんです。夢でも現実でも、私はあなたを愛しているということに。

夢でも現実でも、私が死んでいるということに、何の変わりもないんです」

その途端、幸せな世界は崩壊した。

街並みも、人々も、すべてが音もなく混沌に飲み込まれていく。

シグリッドだけが姿を保っていたが、目の前に立っているドナレインの姿をもう見る事が出来ないようだった。

あたりを見回し何やら必死で叫んでいるシグリッドに、ドナレインが出来ることももう何もなかった。

崩壊する世界の中で、ドナレインの四肢はとっくに混沌に解け、聴力を失い、完全な消滅を目前に控えていた。

あなたを愛している。ずっと、ずっと、ずっと――

別れの挨拶の代わりに、最後まで残っていたドナレインの思念。それもやがて混沌に融けて消えた。

4・夢が現か

雨の夜の惨劇から数週間ぶりに、再びシグリッドの街を雨雲が覆った。

ドナレインのことは不幸な事故として片付けられた。クレードルは全面的にシグリッドを庇ったし、都では地方の一般市民の死は数字でしかない。シグリッドが更迭されることもなく、待機命令や配置換えすらなかった。

だが、住民の態度はこれ以上ないほど硬化した。特にイストリチエ西地区の住民は、シグリッドを排斥せんばかりだった。道を歩けば石を投げられ、誰も口をきこうともしない。どこへ行っても、悪意のこもった言葉がついて回った。

「人殺し！」「出て行け！」「何が黒騎士だ、お前こそ悪魔だ！」「それでも、シグリッドは命を返上することもなく黒騎士としての任務にあたった。

その雨の日、シグリッドは夕方近くになってからやっと目を覚ました。

何か、長い夢を見ていたような気がする。けれども夢を見ていたということだけははっきりしているのに、その夢の中身をどうしても思い出せなかった。

夜、いつものように黒い兜と鎧を身に纏いクレードルと二人で巡回を行う。何事もなく平穩に終わり、解散した。

そのまま家に帰るはずだったのに、気がつけばゼロの酒場の前の壊れた街灯の前に立っていた。

雨が降っていた。

足元を見れば、ドナレインが倒れていた。水溜りの中にうつ伏せで、背中引き裂かれて骨と肉が剥き出しになり、皮膚は火傷で酷く爛れていた。

シグリッドは彼女を見下ろしたまましばらく身じろぎもしなかったが、やがて彼女の体を抱き上げてそのまま家へ帰った。

明け方近くなっても雨のせいで世界は暗闇に包まれたままだった。酷い有様のドナレインを、シグリッドはそっとベッドに下ろす。女一人には大きなベッドに、かつては二人で眠ったのだった。シグリッドとドナレインの二人で。

シグリッドはベッドの横の椅子に腰掛け、そのまま身動きひとつせずただドナレインを見つめた。爛れた顔。切り裂かれた皮膚。腹まで貫かれた傷跡。

「……………ドナレイン……………」

搾り出すようにしてやっと出た言葉はそれだけだった。他には何も言えなかった。

あの忌まわしい、人殺しの黒騎士。

奴がとうとうおかしくなつたと。

何でも空のベッドに向かつて、日がな一日何もせずに過ぐして
いるらしい。

いや、時折シーツを掛け直してやつたり、どうやらいもしない病
人の世話をしているとか。

奴は一人暮らしてベッドは一台きりだろう。

だからずっと眠っていないらしい。

ずっと、ずっと、ずっと――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1417s/>

ドナレインの夢

2011年5月6日22時25分発行